

2013年度東京財団週末学校
国外研修 ポートランド調査

イブニングサイトビジット「Mt. Tabor」

日時：2013年8月20日（水）

文責：春日市 大原佳瑞重

Friends of Mt Tabor (FMT P)

Friends of Mt Tabor (FMT P) は2000年にMt Tabor Park (テイバー山公園) を安全で自然豊かな公園として維持していくことを目的に同公園の近隣住民によって設立された市民グループ。現在、会員は200人を超える。年会費15ドル。会費収入以外に寄付金収入が約4万ドルあり、資金面でも整備された団体として成長している。

Mt Tabor Park (テイバー山公園)

テイバー山公園は、死火山であるテイバー山の上にある珍しい公園で面積は約200エーカー(約80ha)。航空写真でわかるとおり、ポートランド市のサウスイースト地区に対して広い面積を占める。公園では結婚式がよく催され、ランニングやスケートボードのレース場、野外活動場としても利用されている。1500人収容可能な野外ステージでは毎週火曜日にコンサートが開催される。ポートランドは9月中旬から5月にかけて雨季となるので、夏である今がベストシーズンとなっている。私たちが訪れたのは平日午後7時頃だったものの、ポートランドはまだ日が高かったせいか、多くの利用者の姿が見られた。

公園の入口近くにあるビジターセンターには年間約1万人が来館する。ビジターセンターでは、FMT PのオリジナルTシャツを販売しており、活動資金源の一つにもなっている。公園の案内をするだけでなく、地域のことを学ぶ教育施設としての役割を担っている。

公園都市ポートランド

ポートランド市は、市内に約200か所の公園があり、その数は全米でトップ3に挙がるほど多い。それらの公園のほとんどには市民団体がかかわっており、ポートランド市の公園はボランティアによる協力によって成り立っている。その理由の一つには、ネイバーフッド(地縁団体)がボランティアの育成に関わっていることが考えられる。また、ポートランド市には活発な市民が多いことも理由の一つになるだろう。

FMT Pの発足のきっかけ

テイバー山公園は1960年代までは家族連れがよく利用する公園だったが、70-80年代に入って環境が悪化した。治安も悪化し、親が子どもを連れて行き遊ばせたくない公園になっていた。そこで、1990年代に入り、市公園局は公園改修を実施し、主にトイレ改修と野外ステージ等の整備を行った。公園改修の過程の中で、時には週に1回のミーティングがあり、住民と行政との信頼関係が構築されていった。その際に公園局は、周辺のネイバーフッドの住民に対し、公園の愛護活動団体に入るかどうか尋ね、ネイバーフッドの人々は公園の愛護活動に関わりたいと回答した。公園の改修とFMT Pの活動によってテイバー山公園は安全で家族連れに優しい公園となり、実際に、公園がきれいになったことで周辺地域の地価も上昇した。そして、FMT Pも12年間にわたる努力が認められ、賞を受賞した。

FMT Pの活動

FMT Pの主な活動は、公園の見回りや市民ボランティアの活動のコーディネートやボランティアの育成である。

50人のパトロール隊が当番制で2名1組になって公園内のパトロールをしながら、ゴミ拾いをして、巡回記録を報告している。落書き・破損・盗難の有無や来場者に何か問い合わせをされなかったか、犬をつながずに走らせるようなマナー違反はなかったか等を記録したものを提出する。

市民ボランティアの活動には、週2、3回のペースでのゴミ拾いや表示板等の修繕作業があり、他に外来種を除草し、在来種の植物を植える活動もある。ボランティアに対しては外来種を除草し在来種を植える方法等の2時間半のトレーニングを受けてもらっている。

ゴミ拾いのボランティア活動を通じて、市民がゴミを捨ててはいけないことを学ぶことができる。つまり、市民ボランティアを育成することで、公園を利用する市民と公園愛護活動をする市民との対立構造を解消する狙いがある。大切なことは、技術的なことではなく、市民に「ボランティアは楽しい」という経験を持ち帰ってもらうことである。ボランティアを尊重することで、ボランティアも大切にされているという実感が持てる。

成功の秘訣

「どのようなプロジェクトが成功するか」は「どのような関係を築いていくか」ということである。2007,8年頃は、まだ公園を健全にする計画が調整されていなかった。そこで、市の環境局がポートランドの湿地環境の向上を呼び掛け、市と市民とのパートナーシップによって「誰が、何を、いつ実行するか」を示した多くの計画が立案され、市民に自信が芽生え、活動が活気づいた。例えば、公園に植えているシダは2年前に環境局が企画して中学生80人が環境教育の一環として植えたものだ。

イブニングサイトビジット終了後

～テイバー山公園を同行したポートランド市環境局職員（雨水処理と湿地環境の向上業務担当）アンさんと一緒にメキシコ料理店にて食事をしながらの懇談～

市環境局とマウントテイバーとの関わり

マウントテイバー地区は下水道管が古くて管も細い。道路が舗装され、開発により木が伐採されたため、雨が降ると雨水がアスファルトをつたって一気に下水道管に水が流れ込み、下水が溢れてしまう状況にあった。そこで、市環境局は、できるだけ雨水が下水道管に流れ込まないように道路脇に花壇を作り、そこに雨水が流れる仕組みにした。花壇に花を植えたり、花壇の手入れはマウントテイバーの住民が担っている。

コミュニティを巻き込んだ対策

市がコミュニティを巻き込む時は、ネイバーフッドに対し「〇〇という問題があります。そのため私たちは〇〇に直面しています。だから、一緒に〇〇をしていきましょう」と呼びかけている。

当初、市ではマウントテイバー地区の老朽化した下水道管を新しいものに入れ替える計画を立て、1億4400万ドルが予算計上されていたが、1億ドル以上のコストを削減し、かつコミュニティの育成を行う現在の政策（緑化による雨水対策）に方針変更された。現在、ネイバーフッドが道路脇の花壇50か所に3500本を植樹しており、グリーンストリートと呼んでいる。この方針転換が実現できたのは、マウントテイバー地区は過去に高速道路建設が計画された際、住民による反対運動が盛

んに行われ建設計画を中止した地域であり、それを機にネイバーフッドが組織化されコミュニティが活発な地域だったためである。

環境局の取り組み

住民が雨水処理の問題の原因を本当に理解してくれることが重要なので、雨水利用のための緑化推進活動のニュースレターを6年間17,000人に対して毎年送付している。また、美しいガーデニングの写真の展示会をコーヒーショップで開催し、家の庭や店舗にプランターを置くことや駐車場の吸水型の舗装にするように推奨している。また、このメキシコ料理店は地元でも人気の店で、地域への影響力が大きい。本来であれば、店舗の場合は、プランターを置くとその分、駐車場が狭くなるので、どうしても駐車場を広く確保する方が優先順位が高くなるが、この店が駐車場を吸水型の舗装に変え、駐車場の一部を雨水利用型の菜園にして、グリーンルーフを導入したところ、この店の周辺の店舗や住宅にもプランターが増えたり、舗装を吸水型に変える等の変化が見られている(後で登場したメキシコ料理店のオーナーによると、友人の市職員に勧められ、雨水循環の取り組みを始めたとのこと)。

子ども達への環境教育

雨水処理と湿地の向上を推進するために、2名の教育アプローチ担当者が配置されている。例えばテイバー山公園で見た子ども達が植えたシダは、その担当者達が環境教育のプログラムとして作って学校の授業で実施したものだ。また、12歳位の子どもの対象にしたボードゲーム(ビル開発によって雨水が下水道管に流れることになるか、その水を保水するには何本の木を植えることが必要かを遊びながら学習できる)、3歳児位向けにはバッジ集めゲームキット(升目が書いてある布に「トンボ」を見つけたらトンボのバッジを付ける、植物を見つけたらその植物のバッジをつける)を開発している。子ども達の環境教育プログラムを実施する理由は、学習した子ども達が帰宅して親に習ったことを伝え、子どもが大人を動かすことを狙っている。」

政策の選択

市として各地域の住民グループに対して事前に聞き取り調査をしており、その結果に沿って地域の住民に対して一貫したアプローチをすることになっている。例えば、何か地域に問題が発生した際に住民として解決に向けての協力をするとしたら、「解決の一翼を担うことを誇りに感じる(=活動に対しての評価・称賛を求める)」、のか「協力すると割引がある等の金銭的な動機づけが強い(=活動に対しての対価を求める)」のか、金銭的な動機づけが強い場合はいくら位の対価が得られるのであれば行動するのかを事前調査している。

住民と行政の協働

行政(市職員)と住民とが一緒にプロジェクトを作っていくことで関係性を築くことで、何故その活動をするのかについて理解を共有することができる。20年前の市の政策に対して今も怒っている人はいる。その人達に今対応することで、将来の問題を減らすことができると考えている。

(感想)

メキシコ料理店の店員が吸水舗装の駐車場やその脇の大きなプランターを説明しながら、「持続可能性というのはライフスタイルの一つである」と言ったことが印象に残っている。行政施策の押し付けではなく、どのようにアプローチすれば最も住民が主体的に活動に参加するのかを事前に調査した上であらゆる手段を用いて、住民が自ら行動を起こす機運づくりに努めていることを感じた。